

# 井上靖「宦者中行説」論

## ——匈奴を愛した中行説像

### 一、はじめに

井上靖「宦者中行説」は昭和三十八年六月の雑誌『文藝』に発表された短篇小説である。

「宦者中行説」は漢が匈奴の侵攻に悩まされていた頃、匈奴と何とか親交を持つようとして公主を送った時に、目付け役として匈奴へ一緒に付いていった中行説の物語である。

中行説は、燕人であり、もとは漢文帝の宦官であった。文帝は、中行説を匈奴に嫁ぐ女の守り役として匈奴の国に送り込むことに決めた。中行説は匈奴の国に行くことを拒否したが、漢は行くことを強制した。しかたなく中行説は守り役として匈奴の国に行くこととなった。中行説は漢の文帝に、「わたくしが行けばかならず漢の禍いのもともなるう」と言い残した。中行説は

蘇洋

匈奴に到着すると、老上单于に投降しその臣下となった。中行説は老上单于に漢の弱点を教え、漢への侵攻方策を立てた。このことは自身が述べたように漢に対する禍いとなったのであった。古代の中国において、中行説は自分の国家に背いた人物である。中行説のことは中国の歴史書には、ほとんど記されていない。そのため、中行説は中国ではよく知られた人物とは言えない。

山本健吉は『井上靖短篇全集』の「解説」で、中行説について以下のように評した。

『宦者中行説』は、嫁する公主に従って匈奴の王庭へ遣らされた宦者が、そこに居ついて、漢のためにならぬ存在として終結する。日本人にはありえないような、水のように

な觸感を持った冷たい男であり、長篇『風濤』に描かれた、高麗びとでありながら蒙古に降つて祖國を鞭打つた冷血漢 洪茶丘に似たところがある。こういう異常な人物は、井上氏の好みの小説的人物である。<sup>1)</sup>

なぜ井上靖はこのような山本いわく「異常な人物」中行説に興味を持っていたのか。井上はエッセイ「宦者中行説」の中で、「私はこの中行説のことを『宦者中行説』という小説に書いている。この人物を小説に取り扱いたいと思つたそもそもその動機は、われ行かば必ず漢の患いとならん」という中行説の言葉が、ふしぎなものに感じられたからである。」と書いた。井上は中行説の「われ行かば必ず漢の患いとならん」という言葉に興味を持ち、小説「宦者中行説」を執筆し始めた。『史記』では、中行説は漢の文帝に、「わたくしが行けばかならず漢の禍いのもとになろう」と言つて、匈奴に行くと、すぐ投降し、匈奴を助け漢と闘つたことが記されている。『史記』の記述からは次のことが分かる。中行説は匈奴に送り込まれることを不満とし、漢の文帝に仕返ししたと考えたので、「わたくしが行けばかならず漢の禍いのもとになろう」という目的性がある言葉と言つたのであろう。しかし、井上は小説「宦者中行説」の中で、「中

行説は文帝に厭がらせを言ったのではなかった。何となくそのようになりそうな予感を覚え、それを口に出してしまわなければ面倒なことになるような不安を感じたのである。」と描いた。中行説が自ら漢に災いするであろうと言つたことを、井上は「宦者中行説」では「予感」という曖昧な言葉を用いて解釈したのである。さらに、井上はエッセイ「宦者中行説」の中で、このように解釈した理由について、次のように書いている。

この小説を書く時、私は猫の眼を解釈する場合と同じようなものを、中行説のふしぎな言葉に感じた。去勢者というものの物の感じ方、考え方がどういふものか見当がつかないので断言はできないが、もしかしたら、中行説は自分が漢に患いするであろうと言つたことは、私が小説で綴つた予感というような曖昧なものではなく、そうなることが当然だといった確信であつたかも知れないのである。猫が家につくといつた言い方を真似すれば、中行説は人間にも家にもつかない性情の持主であつたかも知れない。いかなる人間にも、家にもつかないといふことは、換言すれば、時と場合で、いかなる人間にも、家にもつかないといふことになるだらうと思う。

もしこのような解釈が可能で、中行説の言葉を、予感でなくて、ごく自然な宦者というものの持つ性情からの発言とすると、宦者中行説の匈奴における半生の行動は全く別の意味を持つてくる。そしてそういう観点から取り扱えば、小説『宦者中行説』は主題の全く異なった怖ろしい小説になる。

しかし、私がそうしなかったのは、猫を童話に取り扱えなかったと同じように、一人の宦者というものの生理を、小説の形に取り扱う勇気がなかったからである。その見方は正しいかも知れないと同時に、また、正しくなかった場合は、大きな間違いを冒すことになりかねなかったからである。<sup>(3)</sup> (傍線は論者による、以下同)

『史記』の中で記されている宦者としての中行説の「わたくしが行けばかならず漢の禍いのもとになるう」という言葉から、中行説が漢の禍になることを確信していたと井上は理解している。さらにごく自然に言ったものかもしれないと考えた。しかし、井上は「そういう観点から取り扱えば、小説『宦者中行説』は主題の全く異なった怖ろしい小説になる。」と考え、さらに、「去勢者というものの物の感じ方、考え方がどういものか見

当がつかないので断言はできない」し、「宦者というものの生理を、小説の形に取り扱う勇気がなかった」ので、「宦者中行説」の中では、「漢のおためにはならぬように」なりそうな予感を覚え、ある不安な想いをもっていたとして中行説の気持を描いた。そこで、井上は中行説を『史記』で記された漢文帝及び漢国に恨みを持ち、匈奴の力を借りて漢国を仕返しした人物として捉えるのではなく、「宦者中行説」という作品では、匈奴に魅力を感じ、生涯を匈奴で終えた人間として中行説の物語を描いた。

さて、「宦者中行説」に関する先行研究は、勝倉寿一の「井上靖『宦者中行説』論」のみである。先行研究では、中行説派遣の史的背景や、井上は「中行説が『宦者』という特殊な職業人」に対する独自の解釈をしたことや、「中行説が匈奴の軍事行動の全てに主導的に関わったとする」歴史史実について論じている。<sup>(4)</sup>

本稿では、中国の歴史書『史記』の中で記されている中行説について説明する。さらに、「宦者中行説」とその典拠である『史記』との相違点と、井上が創作した箇所を指摘し、井上が描く匈奴に魅力を感じた中行説像を明らかにする。そして、「宦者中行説」の主題について迫っていきたい。

## 二、歴史書に記されている中行説

中国の史料では、中行説に関する記述が少ない。そのため、「宦者中行説」を考察する前に、中国の歴史書を取りあげ、中行説がどんな人物であるかを考えてみたい。『史記』と『漢書』では、中行説に関する記述はほぼ同じである。さらに、井上はエッセイ「宦者中行説」<sup>(5)</sup>の中で、「小説ではあるが、殆どフィクションは混じえず、史記の記述をそのまま取り扱っている。」と書いた。そのため、『漢書』での記述は省略し、以下『史記』を「宦者中行説」の典拠として取り上げる。

中行説が『史記』に登場する箇所を以下に記した。

老上稽粥單于初立、孝文皇帝復遣宗室女公主為單于閼氏、使宦者燕人中行説傳公主。説不欲行、漢彊使之。説曰：必我行也、為漢患者。中行説既至、因降單于、單于甚親幸之。<sup>(6)</sup>

翻訳 老上稽粥單于が即位すると、文帝はまた宗室の女を公主と称して單于の閼氏とし、燕人の宦者中行説を、公主のお付き人とした。漢は行きたがらない説を強いて任につかせた。説は、「わたくしが行けばかならず漢の禍いのもとに

なるう」と言った。中行説は匈奴に到着すると、そうした事情から單于に降つてその臣下となり、はなはだ親愛された。<sup>(7)</sup> (A)

中行説は行きたくもない匈奴に派遣された。彼はよほど腹にすえかねたのであろう。中行説は漢文帝に、「わたくしが行けばかならず漢の禍いのもとになるう」と憎悪に満ちた言葉を放つた。さらに、匈奴に至ると、中行説はただちに匈奴に投降した。『史記』の記述から、中行説の漢文帝及び漢朝をひどく憎んだ気持が窺える。

中行説は老上單于に漢と匈奴の衣服と食物の違うところを指摘した。『史記』の中で、中行説が老上單于に説明した場面は、以下のように記されている。

初、匈奴好漢繪絮食物、中行説曰：匈奴人衆不能當漢之一郡、然所以彊者、以衣食異、無仰於漢也。今單于變俗好漢物、漢物不過什二、則匈奴盡歸於漢矣。其得漢繪絮、以馳草棘中、衣袴皆裂敝、以示不如旃裘之完善也。得漢食物皆去之、以示不如湏酪之便美也。<sup>(8)</sup>

翻訳 以前から匈奴は漢の絹や綿や食物を愛好した。中行説は

言った。「匈奴の人口は漢の一郡にも匹敵しません。それにもかかわらず強いのは、漢と衣食を異にし、その供給を漢に仰がないからであります。いま单于が習俗を変えて漢の産物を愛好されるなら、漢は自国で費やす物質の十分の二を匈奴のために費やすだけで、匈奴の民はことごとく漢に服従しましょう。いったい漢の絹・棉でつくった衣服を着、草深い棘の中を駆けめぐったら、衣も袴もたちまち裂けて破れてしまいます。その点でも、漢の衣服が匈奴の皮衣の丈夫なのに及ばないことを国人にお示しになり、また漢の食物を手に入れられても、みな捨てて匈奴の牛乳・乾酪の便利さうまさに及ばないことをお示しになりますように。」(B)

漢と匈奴は生活環境が違う故に、漢の衣服と食物は匈奴には合わなかったことを中行説は強調した。さらに中行説は老上单于に具体的な例をあげ、漢からの供給に頼らないように勧め、統計調査の重要性を説いた。『史記』では、中行説が匈奴人に統計調査の方法を教えた箇所が、次のように記されている。

於是説教單于左右疏記、以計課其人衆畜物。

漢遺單于書、牘以尺一寸、辭曰：皇帝敬問匈奴大單于無恙、所遺物及言語云云。中行説令單于遺漢書以尺二寸牘、及印封皆令廣大長、倨傲其辭曰：天地所生日月所置匈奴大單于敬問漢皇帝無恙、所以遺物言語亦云云。<sup>(9)</sup>

翻訳　そこで説は单于の左右近臣に教え、簡条書きに記録して、匈奴の人口や家畜の数を調べ、税をかけるようにした。漢は单于に書簡を送る場合、長さ一尺一寸の木札を用い、文面には、「皇帝は謹んで匈奴の大单于に御起居如何をお伺い申す。贈る品物は……、その意味は……云々」と書くのを常とした。中行説は、单于から漢へ書簡を送る場合、一尺二寸の木札を用い、また封印も広く大きく長いものを用い、その文面を尊大傲慢に、「天地の生めるところ、日月置くところの匈奴の大单于は、謹んで漢の皇帝に御起居如何をお伺い申す。贈る品々は……、その意味は……云々」とさせた。<sup>(10)</sup> (C)

中行説は老上单于の左右近臣に、匈奴の人口や家畜の数を調べさせ、簡条書きにして記録させた。さらに、老上单于が漢に書面を送る時は、その文章を尊大なものに改めさせた。この箇所から、中行説は知識人だと考えられ、自分の持っている漢

に關する知識を匈奴人に教え、匈奴の立場に立つて漢と対峙していたことが分る。次に記すのは、中行説と漢の使者が匈奴の風俗に關する論争をした場面である。

漢使或言曰：匈奴俗賤老。中行説窮漢使曰：而漢俗屯戍

從軍當發者、其老親豈有不自脫温厚肥美以齎送飲食行戍乎。

漢使曰：然。中行説曰：匈奴明以戰攻為事、其老弱不能闘、

故以其肥美飲食壯健者、蓋以自為守衛、如此父子各得久相

保、何以言匈奴輕老也。漢使曰：匈奴父子乃同穹廬而卧。

父死、妻其後母、兄弟死、盡取其妻妻之。無冠帶之飾、闕

庭之禮。中行説曰：匈奴之俗、人食畜肉、飲其汁、衣其皮、

畜食草飲水、隨時轉移。故其急則人習騎射、寬則人樂無事、

其約束輕、易行也。君臣簡易、一國之政猶一身也。父子兄

弟死、取其妻妻之、惡種姓之失也。故匈奴雖亂、必立宗種。

今中國虽詳不取其父兄之妻、親屬益疏則相殺、至乃易姓、

皆從此類。(後略)

(前略) 中行説輒曰：漢使無多言、顧漢所輸、匈奴繪絮

米糲、令其量中、必善美而已矣、何以為言乎。(後略)

翻訳

漢の使者のある者が、「匈奴の風俗は老人を賤しめます」と言うと、中行説は漢の使者をなじつて、「おまえの漢の

風俗でも、駐屯守備のため從軍して出發しようとするとき、年老いた親として、自分の暖衣や營養のある美味をさいて、出征の子に持たさない親があるだろうか」と言い、漢使が、「それはない」と言うと、説は言つた。

「匈奴は公然と戦争を本務としている。老弱者は戦闘できないので、もっぱら壯者に美食させ、それで自らも国を守っていると思つているのである。それでこそ父老もそれぞれ長く身を保つことができるというもの。どうして匈奴が老人を軽んずるなどと言えよう。」

「しかし、匈奴は父と子が同じ穹廬の中で眠り、父が死ねば継母を自分の妻とし、兄弟が死ねばその嫁をめぐつて自分の妻とし、衣冠束帯の礼装も朝廷の礼式もない。」

「匈奴の習俗では、人は家畜の肉を食ひ、その乳汁を飲み、その皮を着、家畜は草を食ひ水を飲み、季節によつて移動する。それゆえ人々は戦時には騎射を練習し、平時には太平を樂しむのである。その法制は簡易で実行しやすく、君臣の間も気軽で、一國の政治はちょうど一身のように自在である。父や兄弟が死ぬと、その妻をめぐつて自分の妻とするのは、家系の絶えることを恐れるからである。したがつて匈奴はたとえ國が乱れても、かならず同宗同種のものである。」

立てて王とする。しかるに中国では、うわべを飾って父兄の妻をめとらないが、親属はますます疎遠となり、ひいてはたがいに殺しあい、はては革命となつて、帝王の姓を易えるようになる。(後略)「

(前略)「漢の使者よ、多弁を弄するな。漢から匈奴に送る絹・綿。米・麴の量が十分で質が良いようにと心がけさえすればよいのだ。(後略)」(D)

中行説は漢使を鋭い弁舌でやりこめ、匈奴への貢物を大量に引き出すことに成功した。そして中行説は匈奴のために、漢から多くの経済的な利益を得られるように努力したのである。

中行説は老上単于に経済的なことを助言したばかりではなく、常に軍事的なことについても意見を述べた。中行説が老上単于に対し、漢を攻撃すべし、と日夜説いたことが、以下に記されている。

日夜教單于候利害處。(中略)

後四歳、老上稽粥單于死、子軍臣立為單于、既立、孝文帝復與匈奴和親、而中行説復事之軍臣單于。<sup>(14)</sup>

翻訳　そして、漢へ攻め入るのに都合のよい地点を偵察するよ

う、日夜、単于にすすめた。(中略)

四年の後、老上稽粥單于が死に、子の軍臣が立つて単于となつた。文帝は改めて匈奴と和親し、中行説はまた軍臣に仕えた。<sup>(15)</sup> (E)

中行説は「漢へ攻め入るのに都合のよい地点を偵察するよう、日夜、単于にすすめた」と記されている。中行説の教唆により、匈奴は漢に一連の進攻を行った。中行説は自分が予言したように、「漢の禍」となつたのである。

以上、中国の史書の中では、中行説に関する記述は、次の五つにまとめられる。

- A 中行説は漢に不満を持ち、匈奴に投降した。
  - B 中行説は老上単于に具体的な例をあげ、衣食の供給を漢に依存することを勧めるように勧めた。
  - C 中行説は老上単于の左右近臣に、匈奴の人口や家畜の数を調べさせ、簡条書きにして記録させた。
  - D 匈奴の風俗に関して中行説と漢使が論争をした。
  - E 中行説が老上単于に対し、漢を攻撃すべし、と日夜説いた。
- 『史記』では、AからEまでの順番で、五つの中行説に関する出来事を簡潔に記載している。これまで考察してきたように、

中行説は漢文帝及び漢をひどく憎んだ故に、匈奴に投降した。中行説は自分の持っている漢土に関する知識のすべてを匈奴の老上単于に注ぎ込んだ。また、老上単于の対漢攻撃の策を提案し、そのために漢が多大な被害を受けたことも『史記』の中に記されている。

### 三、「宦者中行説」の中で描かれている中行説

ここまで、『史記』の中で記されている中行説に関する五つの出来事を通して、中行説の人となりを説明した。井上は前章で示したこの中行説に関する五つの記述をそのまま使って、「宦者中行説」を創作した。しかし、『史記』の中では、AからEまでの順番で、中行説に関する記述が記されているが、この五つの出来事が起きた年月は詳しく記されていない。そのため、井上は中行説に関する出来事を順序立てて把握するために、「宦者中行説」の中では、この五つを井上自身が考える独自のA—D—B—C—Eの順番で組み合わせた。さらに、「宦者中行説」には、井上が典拠『史記』より加筆した箇所もある。これから、「宦者中行説」と『史記』を比較し、井上が創作したところを考察し、「宦者中行説」の中で、井上が匈奴に魅力を感じた中行説

の姿を創作した理由について論究する。

『史記』の中では、中行説は燕人であり、漢文帝の宦官であったことだけ記されている。中行説の性格や、なぜ漢文帝が中行説を選んで公主の付添いとして匈奴へ赴かせたかについては一切記されていない。しかし、「宦者中行説」では、中行説の性格及び、漢文帝が中行説を選んだ理由が以下のように描かれている。

文帝は歴とした宗室の女を胡地に送る以上、それを略略的に効果あるものにならなければならなかった。決してそのため逆の効果招いてはならなかった。漢の公主は胡地にあつて、夫である単于の心も掴まなければならなかったし、その一族の者とも折合よくやつて行かなければならなかった。当然予想される後宮の女たちとの争いもうまく処理しなければならぬ。そうしたことについて公主に適切な助言を与え得る人物としては中行説の右に出る者はないと思われた。学識もあり、事に当たつての判断も凡庸ではなく、そして何よりも若し必要とあれば自分の生命を投げ出す忠誠心に貫かれている人物である。



この描写は、典拠『史記』に描かれておらず、井上の独創だと考えられる。中行説は「学識もあり、事に当たつての判断も凡庸」ではないから、公主に適切な助言を与え得る人物であり、「若し必要とあれば自分の生命を投げ出す忠誠心に貫かれている」と描かれている。漢文帝にとって、中行説は信頼できる人物であった。しかも、漢文帝が中行説を選んだもう一つの理由は「当然予想される後宮の女たちとの争いもうまく処理しなければならぬ。そうしたことについて公主に適切な助言を与え得る」という点にあった。そのため、中行説に命じて匈奴に行かせることで漢文帝は安心を得たと、井上は創作している。

『史記』では、漢は、行きたがらない中行説を無理に任務につかせた。中行説は、「わたくしが行けばかならず漢の禍いのもとになろう。」と憎悪に満ちた言葉を言った。井上は『史記』に記されている中行説の言葉に基づき、漢文帝と中行説のやり取りを次のように創作した。

文帝は中行説に言った。

「汝はわが宝である。宝を長く手離しておこうとは思わぬ。老上单于の閼氏（妃）としての公主の立場が固まったら、すぐにも呼び返すように取り計らうだろう」

それから文帝はその期間をいまここではつきりしたものにしておこうといった風に、

「十年」

と、それだけ言った。文帝は中行説の顔に眼を当てていたが、やがて、

「七年」（中略）

中行説の口から噎れた、併し表情には似合わぬはつきりした声が出た。

「三年でも、一年でも同じことでございます。若し私を匈奴にお遣わしになるならば、必ずや漢のおためにはならぬようになりましょう」（中略）

中行説は文帝に厭がらせを言ったのではなかった。何となくそのようになりそうな予感を覚え、それを口に出してしまわなければ面倒なことになりそうな不安を感じたのである。

前述したエッセイ「宦者中行説」<sup>16</sup>から、井上は中行説の予感を特に重要視したことが分かる。中行説のちに匈奴に惹かれたことを描くために、井上はこの部分を意図的に改変したものと考えられる。すなわち、当初から漢を憎んだのではなく、あ

くまで、匈奴に行つてから、匈奴を愛していった中行説の姿を作品では浮彫りにしている。

『史記』では、「中行説は匈奴に到着すると、そうした事情から単于に降つてその臣下となり、はなはだ親愛された。」<sup>(17)</sup>と記されている。しかし、井上はこの史料を無視し、中行説が匈奴に到着した後、すぐ単于に投降しないことにし、匈奴での体験を創作した。「宦者中行説」の中で、匈奴での中行説の体験が描かれている箇所を以下に引用する。

中行説は供の者を連れて、そうした昂奮の街を歩いた。中行説には見るもの、聞くものが珍しかった。

中行説は祝宴の夜が自由であつたように、その後も自由に振舞うことができた。(中略)

中行説が胡地へはいつてから幾許もなくして、匈奴が祖先と崇める天地神靈を祀る祭祀が行なわれた。これも亦、厳肅な儀式のあとに、三日三晩にわたる盛大な祝宴が続いた。

中行説は単于とは毎日顔を合わせた。単于は毎朝宮を出て日の出を拝し、夕には月に祈つた。あらゆることを為すに当たつて、月や星が引合いに出された。軍事に於ても、

月盛んなれば攻撃し、月虧ければ兵を退くという有様であつた。

ここには、匈奴が祖先と天地神靈を祀る祭祀を行う場面、単于は毎日に日月を拝し軍事のことも月で決めるといふ匈奴独特の習俗が描かれている。匈奴のこのような習俗は井上の創作ではなく、『史記』にも記されている。以下に引用する。

歳正月、諸長小會單于庭、祠。五月、大會籠城、祭其先、天地、鬼神。秋、馬肥、大會蹕林、課校人畜計。(中略) 舉事而候星月、月盛壯則攻戰、月虧則退兵。<sup>(18)</sup>

翻訳 年の正月には、もろもろの長は単于の庭に小集会して祭祀をおこない、五月には籠城に大集会して、祖先や天地鬼神を祭り、秋、馬の肥えたとき、蹕林に大集会して、人畜の数を調査した。(中略) 事を挙げるには常に月を観察し、月が満てば攻撃し、虧ければ退却した。<sup>(19)</sup>

「宦者中行説」では、井上は『史記』に記されている匈奴の習俗を参照し、中行説が体験した匈奴の習俗を描いたことが分かる。さらに「宦者中行説」では、「祝宴の夜が自由であつたように、

その後も自由に振舞うことができた」という匈奴の自由な雰囲気が強調されている。中行説は匈奴の祖先と天地神靈を祀る独特な習俗に感動し、匈奴の自由な雰囲気惹かれ、「匈奴人の物の考え方をすることも、匈奴人の習俗を知ること、匈奴の武將たちの作戦がいかなるものかを知ること」、すべてに興味を持ち、知らず知らずのうちに匈奴の一員になりたいと考えようになった。

『史記』の中で、中行説と漢使との間で匈奴の習俗に関する論争があったことが記されている。「宦者中行説」にも同じような論争がある。以下に提示する。

中行説が匈奴の地へ着いた翌々年に、漢使がやって来た。  
(中略)

末座の方に坐っていた中行説が口を開いた。自分でも知らないうちに、ふいに言葉が口から飛び出したといったように、そんな自分でも仰えることのできぬものに支えられての発言であった。

「漢使よ。そなたの国である漢の慣わしでも、若者が軍に従う場合、親たちは暖かい衣類とうまく食物を若者に与えないであろうか。匈奴は漢とは違って常に戦闘を忘れぬ

日日を持つている。親たちは日頃でも若く壮んな者には栄養のあるうまいものを与えるのだ。このようにして国を守ればこそ、父も子もお互いに自分を保つことができるのである。どうして、これが老人を軽んじていると言えようか」  
中行説は言った。

『史記』の中に記されている論争(D)匈奴の風俗に関して中行説と漢使が論争をした。と「宦者中行説」での記述を比較すると、論争内容は、ほぼ同じだと推測できる。このことより、井上は『史記』の記述をもとにして、中行説と漢使の、匈奴の習俗に関する論争を描き出したのだと分かる。しかし、『史記』では、中行説は漢文帝を憎んだので、匈奴に投降し、匈奴の単于に仕えた。その後、中行説は匈奴の代表として漢使と論争したと記されている。「宦者中行説」の中では、中行説が「匈奴の地へ着いた翌々年に」、まだ匈奴の単于に仕える前に、漢使と論争したという形で描かれている。より自然に中行説が匈奴に馴染む様子を活写するために、井上は二年間という年月を使った。中行説は二年間くらいかけて、匈奴の習俗や、武將たちの作戦を知ることとなり、匈奴に溶け込むようになった。だからこそ、漢使がわざと匈奴人に尊大な言い方で困らせた際、

中行説は「自分でも知らないうちに、ふいに言葉が口から飛び出したといった」ように、匈奴の立場で漢使と論争していたのだ。つまり、『史記』では、中行説の漢に仕返しをしようという気持ちを強調するため、漢使との論争が記されているが、「宦者中行説」では、中行説が匈奴の習俗を知ったうえで、匈奴に惹かれ、匈奴の単于に仕えようと思う中で、匈奴の立場にたち、漢使と論争したと描かれている。すなわち、作品中でのこの論争は中行説にとって、匈奴の一員として、匈奴の単于に仕えようと思ったきっかけだと考えられる。

これを機に中行説は匈奴の老上単于に仕え始めた。毎日のように老上単于と二人だけの時間を持つようになった。中行説と老上単于の関係が以下に描かれている。

曾て漢の若い天子に対したと同じ忠誠心を以て、老上単于に仕えている自分を発見した。中行説にはいつか漢の文帝が遠く小さい存在になっており、老上単于が自分が神から生命を捧げて仕えるように命じられた人物のように思われ、またそのように見えた。

中行説は「曾て漢の若い天子に対したと同じ忠誠心を以て」、

完全に老上単于の腹心の部下となった。中行説は老上単于に漢が匈奴に供給する衣食の問題を詳しく説明する。

匈奴の人口は漢の一郡にも及ばない。にも拘らず鬪つて漢兵を奔らすのは、衣食を漢に仰ぐことがないからである。いま単于が漢の風俗を真似、漢の物産を愛好するならば、匈奴はやがて漢に靡いてしまっだろう。漢の絹布や綿布を着て草原に馬を奔らせることはできない。到底匈奴古来の皮衣には及ばないのだ。漢の食物を得たら、直ちにそれを棄て、それが到底匈奴の獣乳や乳製品に及ばぬことを、単于は万民に知らせるべきである

前述した『史記』に記されている（B 中行説は老上単于に具体的な例をあげ、衣食の供給を漢に依存することを諦めるように勧めた。）と比較し、内容がほぼ同じだということは明確である。井上は『史記』を参照し、中行説が漢と匈奴の衣食に大きな違いがあることを説明した場面を描いた。さらに、井上は『史記』に記されている（C 中行説は老上単于の左右近臣に、匈奴の人口や家畜の数を調べさせ、簡条書きにして記録させた。）を参考にし、「宦者中行説」では、「何人かの人を使っ

て、匈奴の人口を調べたり、家畜の数を調べたりした。そしてそれを簡条書にして、老上单于のもとに差し出した」というように、中行説が匈奴人に統計の方法を教えたことも描いた。その上で、中行説は「漢軍の組織や戦闘法の長所も挙げれば弱点も挙げ、老上单于をして、それに対する対策」を考えた。前述した『史記』の（E）中行説が老上单于に対し、漢を攻撃すべし、と日夜説いた。）のように、中行説が老上单于に漢を進軍するように勧めたことがここに描かれている。

匈奴は中行説のおかげで、軍力を強化し、漢へ攻撃を仕掛けた。老上单于が歿したあと、漢の使者は中行説を召還するための、文帝からの命令を携えてやってきた。召還された中行説は自分の考えを次のように述べた。

「汝は長安の都を恋しいとは思わぬか。都には知人多く、都の風は甘く、都の水は美しい」

使者が言うと、

「いかにも長安の都も見たいし、都の水も飲みたい。都の空気も吸いたい。旧知の人とも会って語りたい。恐らく文帝陛下がお考えになるより、もっと烈しく、自分は長安の都を死ぬまでに一目でも見たいと思っている。が、单于の

命がなければ、私は帰ることができない。いまはこの漠地が私の故国であり、骨を埋める地である」

中行説は答えた。

ここまでの物語の筋は『史記』に記されておらず、井上が創作したと考えられる。すなわち、「宦者中行説」では、自ら匈奴の人間として、自分の後半生を匈奴で暮らそうと思った中行説の決心が強調されている。

以上の考察により、井上は『史記』の中行説に関する記述を忠実に参照したが、『史記』に記されている中行説の五つの出来事に関しては井上自身が独自に考案した順番で「宦者中行説」の中で取り扱った。さらに、井上は『史記』の中で、中行説が匈奴に赴いた後、すぐ匈奴に投降したという史実は無視した。その代わりに、井上は『史記』の中で、匈奴の習俗に関する記述を参考にし、「宦者中行説」では、匈奴に着いた後、中行説が匈奴の習俗を体験していった場面を描いた。そして、中行説が感じた匈奴の自由な雰囲気を作成した。井上は『史記』の中での中行説及び匈奴に関する記述を活用し、遊牧民族・匈奴の特有な自由さや天地神霊を捧げた習俗を説明した上で、匈奴に惹かれた中行説の姿を描いたのである。

なぜ井上は匈奴の良さを強調し、匈奴の魅力を感じた中行説を描いたのか。それは井上の匈奴への長きにわたる強い興味と関わりがあると考えられる。井上靖は少年時代から、西域への興味を持っていた。井上はエッセイ「シルクロードへの夢」の中で、次のように描いた。

少年時代、私はいろいろな夢を持った。本気で満州へ行って馬賊になって、高粱畑に沈む赤い太陽を眺めたいと思つたこともあれば、北欧の海に沿った大都市へ行って、靴屋の職人として名もない一生を送りたいと思つたこともあつた。(中略)

そのほかにもいろいろな夢を持ったが、そうした少年時代の夢の中で、大人になるまで変色しないで私の心に生き続けて来たのは、中央アジアへの夢である。中央アジアへの夢は少年期というより、青年期に心にはいり込んで来たもので、この夢は満州や北欧よりずっと複雑なものになっている。いつも歴史の背景において、その特殊な自然が考えられているからである。時代は変り、世は変わつても、依然としてその自然は、沙漠も、オアシスも、草原も、昔ながらの姿を持っており、変る方は歴史の方である。そ

この自然の中には往時の人間の営みの欠片が人骨のように散らばっているのである。<sup>20)</sup>

井上は「大人になるまで変色」しない中央アジアへの夢を持っていた。さらに、井上は「学生時代から西域関係のものを読むのが好き<sup>21)</sup>」であった。昭和二十二年から「漆胡樽」、「異域の人」、「敦煌」などの西域に関する作品を創作し、西域への憧憬を文学化した。これらの一連の西域に関する多くの作品は、中国の漢の時代から取材し、創作した。匈奴は中国の北方の遊牧民族であった。漢帝国にとつて匈奴問題は生死にかかわる大難題であった。中国の史書『漢書』、『後漢書』、『史記』の中では、「匈奴伝」という一節が取り上げられ、匈奴の問題が記されている。井上は西域に関する小説を創作するため、『漢書』、『後漢書』、『史記』などの中国の史書を熟読した。そのため、史書の中で記された匈奴について、井上はよく知り、注目していったのである。昭和三十七年に、井上は「落日」というエッセイを現した。以下に「落日」を引用する。

匈奴は平原に何百尺かの殆ど信じられぬくらいの深い穴を穿ち、死者をそこに葬り、一匹の駱駝を殉死せしめて、そ

の血をその墓所の上に注ぐ風習があった。雑草は忽ちにしてそこを覆い、その墓所の所在を判らなくするが、翌年遺族たちは駱駝を連れて平原をさまよい、駱駝が己が同族の血を嗅ぎ当てて咆哮するところに祭壇を造つて、死者に供養したと言う。

私はこの話が好きだ。この話の故に匈奴という古代の遊牧民族を信用できる気になる。因みに彼等の考え方に依れば、そのような平原を地殻と言ひ、そのような平原の果てに沈む太陽を落日と言う。そしてまたそのような平原に降り積む雪を降雪と言うのである。<sup>22)</sup>

井上は「落日」の中で、匈奴という遊牧民族を称賛した。井上は「落日」を始めとして、匈奴について記したものを続々と発表し、昭和三十八年には、短篇小説「明妃曲」、「宦者中行説」を創作した。「明妃曲」の中で、中行説のことにふれた箇所が次のように描かれている。

私は匈奴のファンに違いなかったのである。  
ファンと言へば、甚だ私の意に合った人物が一人いる。

『史記』に紹介されている宦者中行説である。(中略)

この中行説などは、さしずめ匈奴のファンと言つていいだろう。常人では判らぬ匈奴という民族の持つ魅力や、宦者の独特の神経と感受性は敏感に受取つていたのかも知れない。<sup>23)</sup>

「明妃曲」では、「匈奴のファン」としての中行説が描かれている。しかし、「明妃曲」の中では、中行説のことや、匈奴のよいところなどは書き尽くされていない。そのため、小説「宦者中行説」で、井上は中行説の「われ行かば必ず漢の患いとならん」という言葉を中行説の予感だと解釈し、中行説が匈奴に赴いた後、匈奴の習俗や武将たちの作戦を知っていく過程を加筆した。だからこそ「宦者中行説」では、『史記』の中で記されている中行説の漢を憎んだ気持が描かれておらず、匈奴に赴いた後、その自由の雰囲気に惹かれ、匈奴のすべてのものに興味を持ち、匈奴の人間として匈奴の利益のために一生を捧げようという中行説の姿が浮かび上がる。すなわち、中行説の物語に井上の匈奴への憧憬が託されているのだ。これが、「宦者中行説」の重要な主題だと考えられる。

#### 四、匈奴と漢の戦争

「宦者中行説」の中で、興味深いことは大幅な匈奴と漢の戦争が描かれている場面である。井上はなぜ匈奴と漢の戦争場面を描いたのか、そして、中行説が匈奴と漢の戦争の中で、どのような役割を演じるのかについて、本章では論究していく。

井上はエッセイ「西域のイメージ」の中で、次のように述べていた。

『黄河の水』『史記の世界』『敦煌物語』『長安の春』といった書物が現在私の書架に置かれている。いずれも名著という言葉がそのまま当てはまる書物で、『史記の世界』は武田泰淳氏から数年前に頂戴したのだが、他は戦前から私の書棚に収まっている。私はこれらの書物にはいつか一度心からお礼を言わなければならぬと思っている。<sup>(24)</sup>

ここから、井上が武田泰淳の『史記の世界』を読んだことが分かる。『史記の世界』には、「匈奴問題」という一節がある。武田泰淳は匈奴問題について次のように説明している。

匈奴の歴史は古い。その生活の傳統は古い。彼等の生活は、漢とは全く異っている。「平時は牧畜を事とし、禽獸を射獵して生計をなし、事あれば、皆戦闘を習って攻撃略する、これが彼等の天性である。」匈奴の本質は、司馬遷のこの短い言葉の中に含まれている。生活と戦争の結びついた匈奴の生き方は、如何ともしがたい「天性」である。<sup>(25)</sup>

武田泰淳は「生活と戦争の結びついた匈奴の生き方」を匈奴の天性だと指摘した。さらに、『史記の世界』の「匈奴問題」という一節では、中行説に関する説明が以下のように書かれている。

中行説は文帝の代に匈奴に在って、政治的指導者として漢をなやました人。司馬遷は、彼を重んじたとは考えられぬが、匈奴文化を解説して漢文化の危機を指摘したその言葉を、口に苦き良薬、身を焼く淨火として受け取ったことは明かである。(中略)

匈奴には、單純にして素樸、鐵火の如き戦闘文化以外にはない。戦闘文化に對するには、戦闘文化を以てせよ。(中



略) 司馬遷は、中行説の議論の背後に、こうした激しい主張を秘めていたと見て良い。<sup>26)</sup>

『史記』の中には、中行説が匈奴文化と漢文化の違いを指摘した記述が記されている。司馬遷は、中行説の言葉を借りて、匈奴には戦闘文化しかなかった点を強調したと、武田泰淳は『史記の世界』で解釈している。井上は武田泰淳の『史記の世界』を参照し、「宦者中行説」の中で、匈奴と漢の戦争を描いた可能性が高い。『史記』では、中行説は老上単于に漢へ攻撃しようと呼びかけたことだけが記されている。しかし、「宦者中行説」では、中行説は老上単于と同様に、匈奴の大軍が漢の首都・長安を囲み、長安を陥る夢を持っていたことが書かれている。そして、「宦者中行説」では、具体的な例が挙げられ、匈奴と漢の戦争状況が次のように描かれている。

聖紀元前一六六年、つまり文帝の十四年に匈奴は十四万の大軍を動かして、漢の北境に侵入した。老上単于が多年持ち続けて来た黄河以北一帯の地を収める夢を実現するための作戦であった。中行説は月氏討伐に成功して士気昂つているうちに、兵を動かすべきことを老上単于に説き、匈

奴の大騎馬隊を次々に南に送る策を献じたのであった。(中略) 匈奴軍の一兵団は朝那(甘肅省)、肅閔(甘肅省)地方にはいつて行き、その地一帯を掠奪し、北地郡都尉の孫印を斬り、夥しい数の住民、家畜、農作物を収めた。また他の一兵団は彭陽(甘肅省)にまで迫り、陝西省の隴州、雍州にまで侵入した。(中略) 漢兵は長城線を越えて追撃して来たが、匈奴はために一兵をも損することなく、漠北の王庭へ引き揚げることができた。

匈奴の漢に対する戦争に関して、中行説は常に老上単于に策を献じたことが「宦者中行説」には描かれている。このような中行説の作戦計画のおかげで、匈奴は「一兵をも損することなく」、さらに、漢の北境の住民を支配下に置いた。そこで、老上単于の漢土を陥落し占拠するという夢が一步近づいたのである。『史記』には、文帝十四年の匈奴と漢の戦争が記されている箇所がある。以下に引用する。

漢孝文皇帝十四年、匈奴單于十四萬騎入朝、那蕭關、殺北地都尉印、虜人民畜產甚多、遂至彭陽。使奇兵入燒回中宮、候騎至雍甘泉。(中略) 單于留塞内月餘乃去、漢逐出塞即還、

不能有所殺<sup>27)</sup>。

翻訳 漢の文帝の十四年、匈奴の単于十四万騎が朝那・蕭関に侵入し、北地郡の都尉印を殺し、人家や家畜を多く虜にし、ついに彭陽にいたり、遊撃部隊を入りこませて回中宮を焼き、斥候の騎兵は雍の甘泉宮に迫った。(中略) 漢は追うて国境の外まで出たが、すぐに引き返し敵を殺すことができなかった<sup>28)</sup>。

『史記』に記されている匈奴と漢の戦争と「宦者中行説」の中で描かれている戦争場面とを比較すると、内容がほぼ同じだと言える。井上は『史記』に基づき、匈奴と漢の戦争場面を描いたのである。しかし、『史記』の中では、中行説が漢を攻撃するための策を老上単于に献じたことが記されておらず、この部分は井上の創作だと考える。紀元前一六一年に、突如として老上単于は歿し、軍臣単于が即位した。中行説は「大軍を動かす機会はこの数年間にあると思う。それは漢に対して、呉、楚、趙の王たちの誰かが叛旗を翻す時である。その時こそ単于は匈奴の全軍を漢土へ投入すべきであろう」と予言した。しかし、呉、楚七国の乱が起こった時、中行説は既に亡くなっていた。中行説の漢土を収める夢が実現されることはなかったのである。

井上は武田泰淳の『史記の世界』を通して、匈奴の戦闘文化の理解を深めた。井上は、『史記』の匈奴と漢の戦争に関する記述を参照し、匈奴と漢の戦争場面を描いただけではなく、中行説が単于に作戰計画の策を献じた場面を創作した。「宦者中行説」では、中行説は匈奴の人間として匈奴の利益を守り、単于に策を献じ、画策した黒幕の役割を演じている。ここに、井上が匈奴と漢の戦争を描く理由があると考えられる。

## 五、おわりに

中行説は漢文帝時代の宦者である。『史記』などの中国史書の中では中行説に関する記述が少ないため、中行説は中国の人々によく知られた人物とは言えない。しかし、井上は中行説が言った「われ行かば必ず漢の患いとならん」という言葉を不思議なものだと感じた。そのため、「われ行かば必ず漢の患いとならん」という言葉が、井上の小説「宦者中行説」を創作した動機となった。本稿では、『史記』の中行説に関する記述と、「宦者中行説」の中で描かれている中行説の姿を比較し、小説の後半部分では井上が匈奴と漢の戦争を描いた理由について考察した。

井上は中行説に関する史記の記述をもとに「宦者中行説」を創作した。しかし、井上は中行説の「われ行かば必ず漢の患いとならん」という言葉を予感から発せられたものと解釈し、『史記』の中で記されている中行説の記述の順番を自分の考えで組み替えた。さらに、井上は『史記』を活用し、中行説が匈奴に赴いたあと、匈奴の習俗を体験したことについて独自の観点で創作し、匈奴に特有な自由さを強調した。また井上は武田泰淳の『史記の世界』の一節「匈奴の問題」からヒントを受けて、「宦者中行説」の後半部分で、匈奴と漢の戦争を描き、匈奴の戦争文化を説明した。

『史記』では、漢文帝に憎しみを募らせ、匈奴に投降し漢国に仕返しをした中行説の姿が描かれている。しかし、井上は、「宦者中行説」において、それとは異なる中行説の姿を描いた。すなわち、それは、匈奴の魅力に憧れていき、馴染んでいく中行説の姿であった。「われ行かば必ず漢の患いとならん」という予感のとおり、匈奴の習俗や権力者の人柄に大きい魅力を覚え、匈奴の人間として匈奴を守るため漢と対立し、生涯を匈奴で終えた中行説の姿を描いたのである。

「宦者中行説」は中行説の物語が描かれているだけではなく、中行説の物語を通して、匈奴の自由さや生活と戦いが結びつい

た文化が強調され、さらに井上の匈奴への憧れが表れた一作だと考えられる。

〔参考文献・注〕

- (1) 山本健吉「解説」『井上靖短篇全集』人文書院 昭和四十五年一月二十日
- (2) 井上靖「わが一期一会」昭和四十九年五月五日より翌五年一月二十六日まで毎週日曜日の『毎日新聞』に三十九回にわたって連載。
- (3) 注2 同
- (4) 勝倉寿一「井上靖『宦者中行説』論」『福島大学人間発達文化学類論集26』平成二十九年十二月
- (5) 注2 同
- (6) 『史記 古典研究会叢書 漢籍之部』汲古書院 平成十年二月
- (7) 『筑摩世界文学大系7 史記Ⅱ』訳者 小竹文夫 筑摩書店 昭和四十六年七月二十五日
- (8) 注6 同
- (9) 注7 同
- (10) 注6 同

- (11) 注7 同
- (12) 注6 同
- (13) 注7 同
- (14) 注6 同
- (15) 注7 同
- (16) 注2 同
- (17) 注7 同
- (18) 注6 同
- (19) 注7 同
- (20) 井上靖「シルクロードへの夢」『婦人画報』昭和三十五年八月
- (21) 井上靖「西域のイメージ」『世界教養全集』18月報5  
平凡社 昭和三十六年二月
- (22) 井上靖「落日」『地中海』新潮社 昭和三十七年
- (23) 「明妃曲」『井上靖全集第六卷』新潮社 平成七年十月十日
- (24) 注21 同
- (25) 武田泰淳『司馬遷——史記の世界』文藝春秋新社 昭和  
三十四年二月十五日
- (26) 注25 同

- (27) 注6 同
- (28) 注7 同

※井上靖の作品本文は、『井上靖全集 第六卷』（平成七年十月十日 新潮社）に拠る。なお、本稿の引用部分のルビは省略している。

（そ よう／本学大学院生）